主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する力を育てる 第６学年国語科学習指導

切実な問題を生み出す状況づくりと「論証の構造」を生かした活動の設定を通して

糸田町立糸田小学校
教諭　楠木　文太郎

こんな手立てによって…

子どもが切実な問題をもつことができるような状況づくりと、より効果的な材料を選ぶことで相手の納得・共感を得ることができるような､「論証の構造」を生かした活動を設定した。

こんな成果があった！

相手・目的意識、適材意識、価値意識をもつことで、書くことへの意欲を高めるとともに、自分の文章を繰り返し読み、適切に表現する力を育てることができた。

１　考えた

中央教育審議会答申（平成２８年１２月）において、「文章で表された情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である。」との指摘がある。そのような中、平成２９年３月に告示された新学習指導要領では、情報の扱い方に関する事項が新設された。その中で、文章に含まれている情報と情報との関係を捉えて理解したり、自分のもつ情報と情報との関係を明確にして文章で表現したりすることが重要であることが示された。このことから、子どもが文章を書く際に、主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する力身に付ける学習の在り方を究明することとした。そこで、めざす子ども像を具現化するために、子どもの切実な問題を生み出す状況をつくるとともに、「論証の構造」を生かした活動を設定するようにした。

２　やってみた

日常生活の中で子どもが問題の存在を意識し、書くことによってその問題の解へとせまることができるような状況を生み出すために、授業実践Ⅰでは、「高学年として大切なこと」、授業実践Ⅱでは、「将来の夢」を題材として、相手・目的意識、適材意識、価値意識をもつことができる単元を設定した。授業実践Ⅰでは、「論証の構造」を見いだす活動に焦点化した。授業実践Ⅱでは、授業実践Ⅰで見いだした「論証の構造」をもとに、文章を書くことができるようにした。特に、「理由づけ」の段落に重点を置き、どんな「理由づけ」の材料を集めると効果的なのかを話し合う活動を設定した。

３　成果があった！

子どもは、相手や目的、適材意識をもって文章を書くことができた。それぞれの意識をもつことによって自分の文章の課題を見つけ、材料の不備・不足に気づくことができた。このことにより、相手を説得し、共感してもらえる文章にしようと、効果的な材料を選び、それらの材料をもとに、適切に表現することができた。さらに、授業実践Ⅰ・Ⅱのどちらにおいても、より効果的な材料を選ぶことができるように、再取材した材料や見直しの作文を相互評価する活動を設定した。

＜目次＞　学校教育部門作品

主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する力を育てる
第６学年国語科学習指導

副主題切実な問題を生み出す状況づくりと「論証の構造」を生かした活動の設定を通して

１　主題設定の理由 …… ３
（１）現代社会の要請から …… ３
（２）国語科教育の今日的課題から …… ３
（３）児童の実態から …… ４

２　主題の意味 …… ４
（１）「主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する」とは …… ４
（２）「切実な問題を生み出す状況づくり」とは …… ５
（３）「『論証の構造』を生かした活動の設定」とは …… ５

３　研究の目標 …… ６
（１）研究の目標 …… ６
（２）めざす子ども像 …… ６

４　研究の仮説 …… ６

５　仮説検証の着眼 …… ６
（１）切実な問題を生み出す状況づくり …… ６
（２）「論証の構造」を生かした活動の設定 …… ７

６　研究の実際 …… ８
（１）授業実践Ⅰの実際と考察 …… ８
（２）授業実践Ⅱの実際と考察 …… １８
（３）全体考察 …… ２４

７　成果と課題 …… ２５

＜参考文献＞ …… ２５

＜本文＞　学校教育部門作品

主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する力を育てる
第６学年国語科学習指導

切実な問題を生み出す状況づくりと「論証の構造」を生かした活動の設定を通して

糸田町立糸田小学校
教諭　楠木　文太郎

１　主題設定の理由

（１）現代社会の要請から

グローバル化や情報通信技術の進展に伴い、人・モノ・情報や様々な文化・価値観が国境を越えて流動化するなど、変化が激しく先行きが不透明な社会に移行している。このような時代を生き抜くためには、情報を受け取るだけではなく、自らの考えを自発的に表現し、考え方や立場の異なる人々とのコミュニケーションを通して、新しい価値あるものを想像していくことが求められている。

加えて、現代社会においてはインターネットやメール、ＳＮＳなどの情報通信機器を利用して不特定多数の相手と容易にコミュニケーションを図ることができるようになった。このようなコミュニケーションツールを使うことで時間や場所を問わずに誰とでもつながることができるという利便性が向上した。しかしその一方で、メールなどを使ってのけんかやネットいじめなどのトラブルも急増している。これは、自分の言いたいことしか言っておらず、自分の伝えたいことに対する根拠が不足し、不十分であることが要因として考えられる。このことから、自分の伝えたいことが相手に伝わるように根拠を明確にして表現する力を育む必要性が求められている。

（２）国語科教育の今日的課題から

全国学力・学習状況調査の結果からは、基礎的・基本的な知識・技能の習得については一定の成果が認められている。しかしその一方で、思考力・判断力・表現力等を問う問題や記述式の問題、獲得した情報の関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることなどに課題が見られた。これまでも、「書くこと」の学習においては、論理的な文章を書く力の向上が求められてきた。しかし、依然複数の情報を関連付けて理解を深めたり、自分の考えについて根拠を明確にして書いたりすることなどの課題として指摘されている。そのような中、急速に情報化が進展する社会において、様々な媒体の中から必要な情報を取り出したり、情報同士の関係を分かりやすく整理したり、発信したい情報を様々な手段で表現したりすることが求められている。

一方、中央教育審議会答申（平成２８年１２月）において、「教科書の文章を読み解けていないとの調査結果もあるところであり、文章で表された情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにすることは喫緊の課題である。」と指摘されているところである。そのような中、平成２９年３月に告示された新学習指導要領では、情報の扱

い方に関する事項が新設された。その中で、文章に含まれている情報と情報との関係を捉えて理解したり、自分のもつ情報と情報との関係を明確にして文章で表現したりすることが重要であることが示されていれる。

このことから、国語科「書くこと」の学習を通して、主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する力を身に付ける学習の在り方を探る本研究は意義深いと考える。

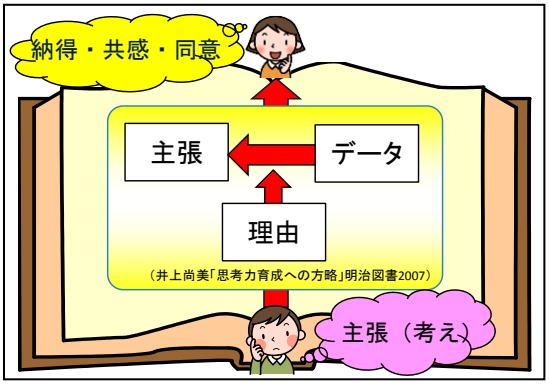
（３）児童の実態から

本学級の子どもは、学習の中で自分の考えを書いたり、帰りの会で５分間作文に取り組んだりしており、文章を書くことには慣れてきている。５年生までの作文学習では、書く事柄に必要な材料を様々な方法で集めることやその材料を並べて自分の伝えたいことを明確に書く学習をしてきている。しかし、考えたことや出来事、調べたことを時系列で並べるだけの文章が多く、物事を整理して述べることができる子どもは少ない。本学級の子どもの書く能力を調べたところ、書くことに必要な材料を集めることは８８％ができている。しかし、集めた材料の中から主張と関係づけて、主張がより説得力を増すような材料を選ぶことができる子どもは３５％しかいない。さらに、相手の同意を得たり納得したりするように文章を書くことができる子どもは２０％ほどしかいない。その原因としては、主張するためにどの材料がより説得力をもたせることができるかを吟味して表現する力の弱さが挙げられる。主張である自分の考えと材料を関係付けずに選んでしまうことで、何を伝えたいのか分からない文章になったり、筋が通らずに説得力のない文章になったりしてしまう事が多い。このような子ども実態から、主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する子どもの姿の具現化を図る。

２　主題の意味

（１）「主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する」とは

「主張」とは、物事に対する書き手の考えであり、「材料」とは、伝え合う内容を構成する体験や、本や文章を調べたり聞いたりすることによって得た情報のことであり、書く内容を考える際の素材となるものである。子どもが十分な材料を集めるためには、集材と選材の二つの段階がある。集材は、「書くために必要だと思われる材料を広がりをもって多様に集めること」であり、選材は、「集めてきた材料の中から本当に必要なものだけを選び取ること」である。本研究においては、目的や意図をもった材料を主張と結びつけながら、より効果的な材料を選ぶことができるように、選材の段階に焦点をあてる。「整合性を吟味する」とは、主張と材料の結びつきをとらえ、相手や目的、意図に応じてより効果的な材料を選ぶことができているかどうかを思考力を働かせて調べることととらえる。



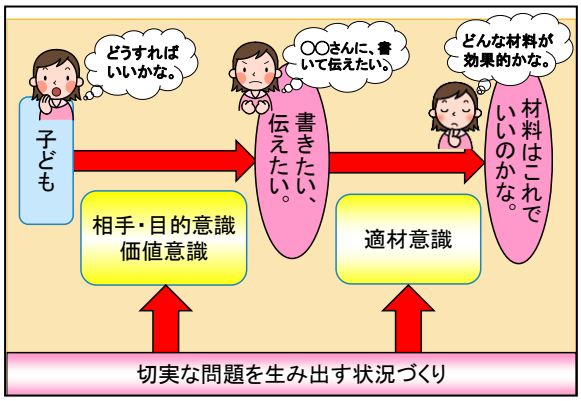
【資料１　主張と材料の整合性を吟味し適切に表現する子ども】

「適切に表現する」とは、本研究においては、論理的な文章を書くこととととらえる。「適切に」とは、相手や目的に対して効果的であり、相手に納得・共感・同意してもらえるように文章に書き表すことである。

「主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する」とは、自分が伝えたいことを相手の納得・共感・同意を得ることができるように、主張と材料とを結びつけながらより効果的な材料を選んで文章表現することである。

（２）「切実な問題を生み出す状況づくり」とは

「切実な問題」とは、子どもの日常に根ざし、子どもの内面から解決へ向かおうとせざるを得ないような問題のことである。相手意識・目的意識をもたせることでその思いをさらに高め、子どもが本気になって取り組むような状況を生み出すことが大切であると考える。さらに、書くことの有用感につながる価値意識をももたせることで、書くことによって解決したいという表現への意欲にまで高めていく。このような書く意欲をもった子どもに適材意識をもたせることで、主張を支えるための効果的な材料を意図的に選び、より適切な表現へと高めることができるものであると考える。



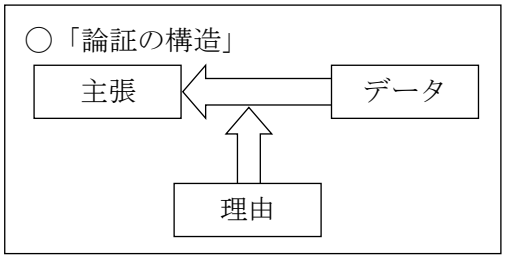
【資料２　切実な問題を生み出す状況づくり】

つまり、「切実な問題を生み出す状況づくり」とは、日常生活の中で子どもが問題の存在を意識し、相手意識・目的意識・価値意識をもつことで、書くことによってその問題の解決へと迫ることができるような状況を生み出すことである。このような切実な問題意識をもつことにより、子どもは何としても相手を説得したい、同意を得たいという意欲をもち続けることができると考える。

（３）「『論証の構造』を生かした活動の設定」とは

「論証の構造」とは、井上尚美氏が「思考力育成への方略」（明治図書 2007）の中で示している指導内容である。井上はその中で以下のように述べている。

論証の型としてよく用いられるのは、「演繹型」と「帰納型」である。どちらの型の場合でも、受け手を納得させるために必要不可欠なのは、結論となる主張とそれを裏づける理由やデータや条件である。これらを図示すると右記のようになる。



このような「論証の構造」を生かした活動を設定していくことで、めざす力を育成していく。そのための活動として、以下の２点を設定する。

①論証の構造を見いだす活動

「論証の構造」を具体化したモデル作文をもとに、子ども自身が論証の構造を見いだすことで、自分の作文の材料の不備、不足に気づき、より効果的な材料の必要性を感じることができると考える。このような活動を行うことで、子ども自身が主張に対する根拠の大切さや理由づけの大切さに気づくことが必要であると考える。

②論証の構造を生かした相互評価活動

ここでは、見いだした論証の構造を生かした相互評価活動とチェックリストをもとにした推敲段階での相互評価活動の二つの相互評価活動を設定する。チェックリストとは、井上尚美氏が、「思考力育成への方略」（明治図書 2007）のなかで提唱している「批判的な読み」のチェックリストである。①語の用法は明確であるか。②証拠となる資料・事例は十分に整っているか。③論の進め方は正しいか。この３つの観点で相互評価活動を設定することで、子どもは、論証の構造のよさに気づき、より適切に表現することができると考える。

３　研究の目標

（１）研究の目標

第６学年国語科「書くこと」の学習において、主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する力を育てるための方途として、切実な問題を生み出す状況づくりと「論証の構造」を生かした活動の有効性を明らかにする。

（２）めざす子ども像

○　説得力をもたせるためのより効果的な材料を選ぶことができる子ども。

○　主張したいことが明確に伝わるように論理的な文章を書くことができる子ども。

○　考えを交流することによって、自分の見方・考え方を広げたり深めたりしながら、文章を書くことへの有用感をもってこれからの言語生活に生かすことができる子ども。

４　研究の仮説

第６学年国語科「書くこと」の学習において、以下の手立てを講じれば、子どもは主張と材料の整合性を吟味して適切に表現する力が育つであろう。

（１）切実な問題を生み出す状況づくり

（２）「論証の構造」を生かした活動の設定

①論証の構造を見いだす活動

②論証の構造を生かした相互評価活動

５　仮説検証の着眼

（１）切実な問題を生み出す状況づくり

子どもの問題を切実なものにするために、相手意識・目的意識がかかせない。しかし、

高学年においては、書くことの有用感などにつながる価値意識をもたせることも必要であると考える。さらに書く意欲を高めた子どもに適材意識をもたせることで、意図をもって主張を支えるためのより効果的な材料を選び、より適切な表現へと高めることができるものであると考える。このようにして、書くことに対する、また、主張と材料との整合性に対する子どもの切実な問題を生み出していくようにする。

切実な問題を生み出す状況づくりのために、以下の通り３つの視点から学習活動を設定する。

相手・目的性	・相手・目的意識を明確にし、書いて伝えたいという思いを高めることができるように、題材や題材との出会わせ方を工夫する。その際、子どもにとって解決せざるをえない、もしくは、表現せざるを得ないような場や題材を設定する。
適材性	・主張を支えるためのより効果的な材料を選び、より適切な表現へと高めることができるように、「論証の構造」を具体化したモデル作文を提示する。そこから自分の作文の材料の不備・不足に気づかせるようにする。さらに、付箋紙を用いた相互評価活動を仕組み、効果的な材料を吟味するようにする。
価値性	・書くことの有用感をもつことができるように、子どもが表現したものについて相手の納得・共感・同意を得ることができるような場を設定することで、書くことへの価値を見いだすことができるようにする。

（２）「論証の構造」を生かした活動の設定

①論証の構造を見いだす活動

子どもの自力解決の手立てとして「論証の構造」を具体化したモデル作文を提示し、作文のよさを話し合う活動を通して構造を見いだすようにする。さらに、構造をもとに自分の作文を分析する。そこで自分の作文の材料の不備、不足に気づかせ、再取材をする必要感をもつことができるようにする。このような活動を行うことで、子どもは、主張と材料の結びつきを考え、より効果的な材料を選ぶことができると考える。

②論証の構造を生かした相互評価活動

より効果的な材料を集めることができるようにするために、相互評価活動を設定する。論を再構成した後に論証の構造を生かして相互評価することで、相手の立場に立った適材意識を高めることができるようにする。さらに二次作文を書いた後に、自分の作文をより効果的な文章にすることができるように、推敲段階での相互評価活動を設定する。ここでは、チェックリストをもとに行い、友だちのアドバイスを見直しながら自分の作文を付加修正するようにする。

６　研究の実際

（１）授業実践Ｉの実際と考察

ア　単元　５年生に伝えよう！　～高学年として大切なこと～

イ　単元の目標

○　５年生に自分の意見を伝えることに関心をもち、相手の同意を得ることができるように工夫し、主体的に文章を書こうとしている。　（国語への関心・意欲・態度）

◎　目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理することができる。（書く能力）

○　自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えることができる。（書く能力）

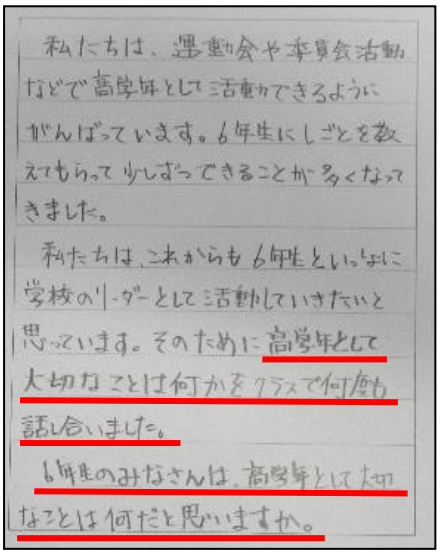
○　文章にはいろいろな構成があることについて理解することができる。（言語についての知識・理解・技能）

ウ　授業の実際

【着眼１】　切実な問題を生み出す状況づくり

本単元においては、５年生からのメッセージをもとに、相手意識・目的意識をもたせるようにした。さらに、高学年になったばかりの５年生に伝えるという有用感に向けて活動することで、価値意識を高めていった。論証の構造をモデル作文から見いだした後、試しの作文の問題点を見つけ、どんな材料を集めると効果的なのかという適材意識をもたせるようにした。このように、相手意識・目的意識と適材意識をもたせる単元づくりを行った。

単元の導入における単元設定としては、相手・目的意識をもたせるために、５年生からのメッセージを子どもと出会わせた。資料Ｉ－１は、「高学年として大切なことは何か。」という内容を書いている５年生からの手紙である。子どもは、「５年生は、学校のリーダーとして活動したいんだね。」「私たちも５年生の時に同じようなことを話し合ったね。」などと、５年生の思いや自分たちの経験について語り合う姿が見られた。そこで、このような子どもに、「５年生が困っているみたいだけど、どうしますか。」と投げかけた。子どもからは、「５年生に高学年として大切なことを伝えたい。」という意見が出された。中には、「５年生にも高学年として糸田小のリーダーになってほしいな。」とつぶやく姿が見られた。


私たちは、運動会や学芸会活動などで高学年としての活動ができるようにがんばっています。6年生にしごとを教えてもらって少しずつできることが多くなってきました。
私たちは、これからも6年生といっしょに学校のリーダーとして活動していきたいと思っています。そのために高学年として大切なことは何かをクラスで何度も話し合いました。
6年生のみなさんは、高学年として大切なことは何だと思いますか。

【資料Ｉ－１　５年生からの手紙】

さらに、「５年生に、どのように伝えるとよいですか。」と投げかけた。子どもから、「文章で伝えるといいんじゃないか。」という意見が出された。すると、「文章だったら、悩んだり分からなくなったりしたときに、何度も読み返すことができるからいい。」や「今の５年生だけではなく、これからの５年生にも読んでもらえるようにできるからいいんじゃないか。」など、

文章で伝えることに同意する考えが出された。さらに、「せっかく書いて伝えるなら、文集のようにまとめるといいんじゃないか。」という子どもの意見にみんなが同調していき話合いがまとまっていった。

このように、５年生からのメッセージを子どもに出会わせることで、相手意識・目的意識と自分たちの思いを５年生に書いて伝えるという価値意識をたせることができた。

【着眼２】「論証の構造」を生かした学習活動の設定

①論証の構造を見いだす活動

［試しの作文を書く段階］

主張したいことを明確にすることができるように、イメージマップで「高学年として大切なこと」に対する考えを絞り込んでいった（資料Ｉ－２）。子どもは、イメージマップをつくりながら、自分が一番大切だと考えることを見つけることができた。

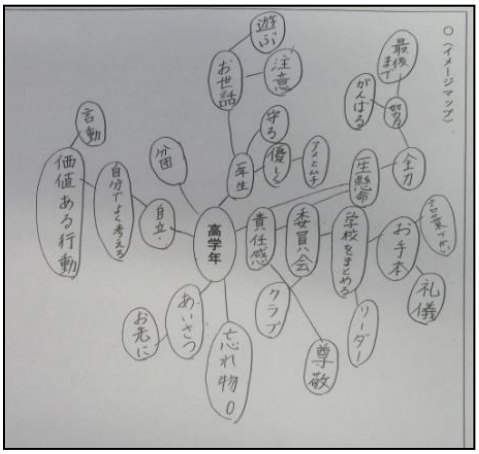
子どもが考えた主張を大きく分けると２３人中、

・「責任感」１０人・「一生懸命」４人

・「あいさつ」４人・「学校のために働く」２人

・「継続力」１人・「素直」１人・「意識」１人

となった。この主張を結論で使えるように一文で表すようにした。



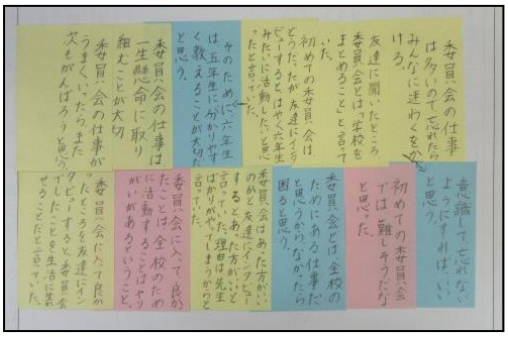
【資料Ｉ－２　イメージマップ】

子どもは、初めの主張文を以下のように書いた。

・責任をもってすることが大切だ。　　・自分の力でできたことは継続することが必要だ。 ・何事にも一生懸命に取り組むことが大切だ。 ・素直でいることで自分の力を高めることができる。

その後、この主張文をもとに取材活動を行った。書く必要のある事柄を多く集めることができるように、①自分の経験から考える。②本で調べる。③友だちや先生（大人）に聞くことを取材の方法として確認した。

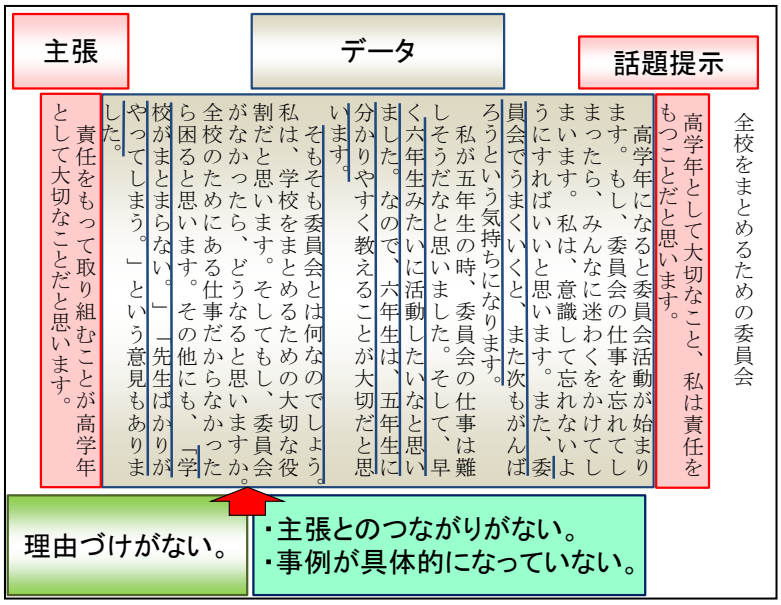
材料をより多く集めることができるようにすることと、集めた材料を取捨選択することができるように集めた材料を付箋紙に書き込むようにした。子どもは、主張したいことの意味や考えなどを本で調べたり先生や友達に話をきいたりして材料を集めることができた。また、友達同士で、「そっちの方が主張に関係するんやない。」「それは関係ないやろ。」などと話し合いながら材料を集める姿が見られた。資料Ｉ－３は、子どもが集めた材料である。このように集めた材料を、主張したいことと結びつけながら必要な材料を取捨選択して、試しの作文を書いた。



【資料Ｉ－３　子どもが集めた材料】

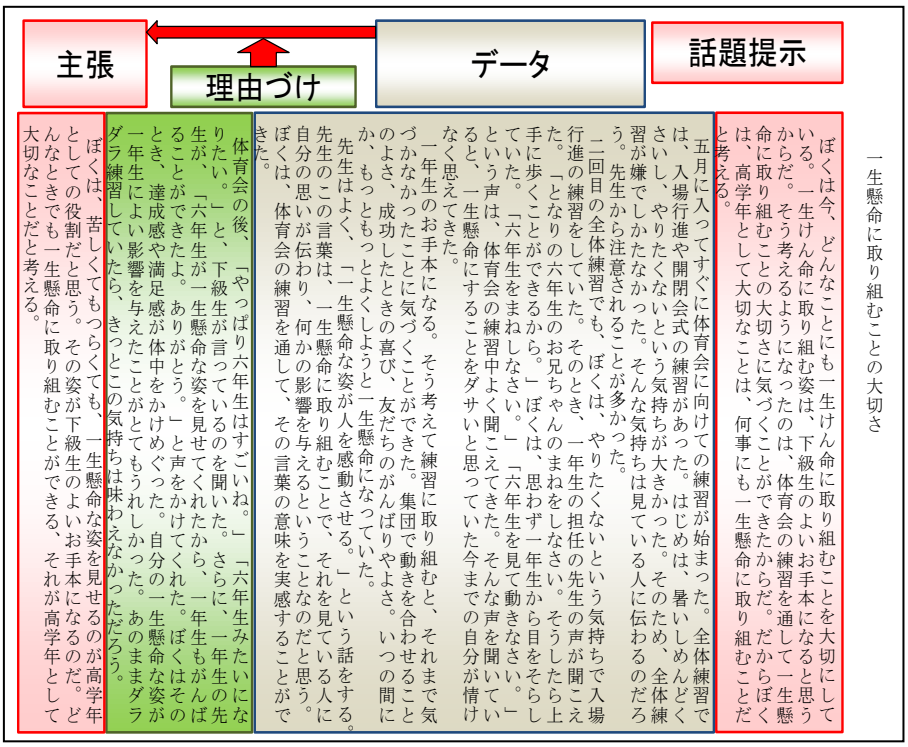
○試しの作文

A児は、主張を「責任をもって取り組むことが大切だ。」として試しの作文を書いている。主張に対する意識はあるものの、「高学年として大切なことは責任だ」ということを主張する文章にはなりえていない。これは、材料に主張とのつながりがないこと、主張を支えるデータの材料はあるものの具体的になっていないことが理由として挙げられる。これは、高学年として大切だという根拠の材料が不足しているといえる。さらに、責任をもつことのよさ、価値についての「理由づけ」がない。



【資料Ｉ－４　Ａ児の試しの作文】

試しの作文を書き終わった子どもは、書いたことに満足する姿が多く見られた。そこで、「みんなが書いた作文で、５年生は納得してくれるかな。」と投げかけた。子どもは自分の作文を読み返したり友だちと作文を読み合ったりしながら、「これじゃあ、納得しない。」「何を伝えたいのか分からない。」などとつぶやく姿が見られた。そのような中で、どのように文章をよいかという疑問をもった子どもにモデル作文を提示した（資料Ｉ－５）。



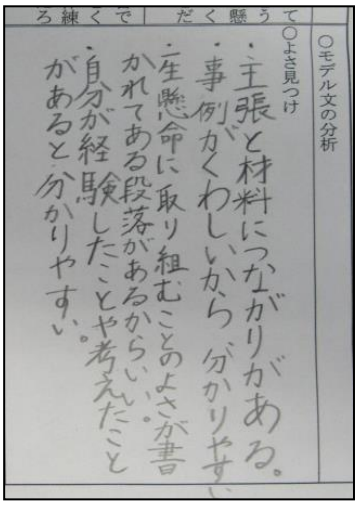
【資料Ｉ－５　モデル作文】

このモデル作文を読み、感じたことや気づいたことを話し合った。子どもからは、

・分かりやすい。	・主張したいことがよく分かる。	・五年生によく伝わる。
・高学年として大切なことに納得できる。	・様子が詳しい。	・会話文がある。
・取り組むことのよさが書いてある。	・こんな作文を書きたい	

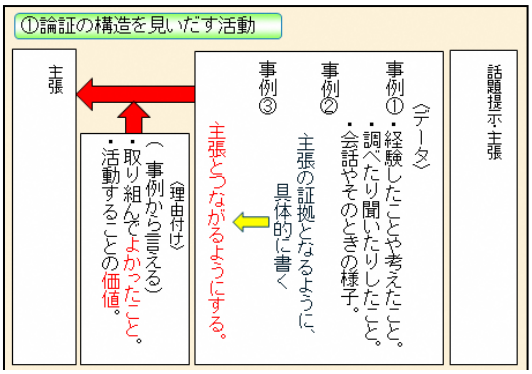
などの感想が出された。そこで、論証の構造を見いだすために、モデル作文のよさを見つけて作文のきまりとすることを確認した。

モデル作文のよさを分析していく中で、子どもは、「主　張と材料がつながっている。」「材料が具体的だから分かりやすい。」「よさを書いている段落があるから納得できる。」など、様々な作文のよさを見つけることができた（資料Ｉ－６）。さらに、子どもの「よさが書いてある段落がある。」という発言を取り上げ、主張に説得力をもたせるためには、データを示すだけではなく、材料から分かるよさや価値を述べる必要があることを確認し、その段落を「理由づけ」と名付け、作文のきまりとして共通理解した。



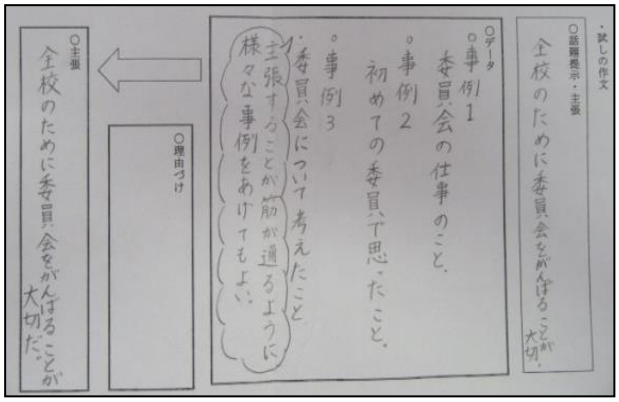
【資料Ｉ－６　モデル作文のよさ見つけ】

資料Ｉ－７は、子どもがモデル作文を分析したことを、作文のきまりとして図に示したものである。子どもはモデル作文から、説得力のある文章を書くためには、主張と結びつくように材料を選ぶことや適切な材料を選ぶだけではなく、データからいえるよさや価値を述べる理由づけが必要であることに気づくことができた。



【資料Ｉ－７　子どもが見いだした論証の構造】

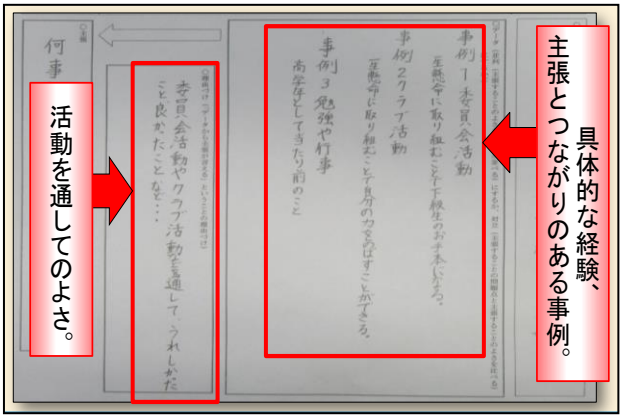
資料Ｉ－８は、論証の構造をもとに、試しの作文を分析した子どものワークシートである。子どもは、試しの作文の分析で具体的な経験がないことや主張と材料がつながっていないこと、理由づけの段落がないことなどの問題点を見つけることができた。その後、「事例から主張が言えるか。」「より説得力をもたせるためには、どのような材料が必要か。」を視点に再取材を行った。



【資料Ｉ－８　子どもの試しの作文の分析】

②論証の構造を生かした相互評価活動

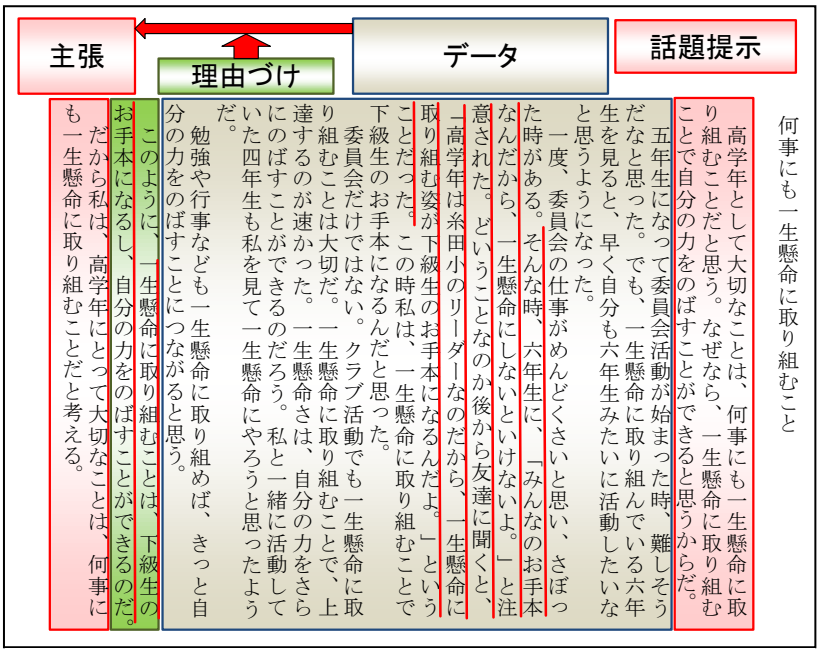
再取材をしたあと、構成表をつくって相互評価活動に取り組んだ。子どもは、論証の構造をもとに、お互いの構成表を評価していった。相互評価する中で、子どもの、「材料がもっと具体的になるといい。」「この材料は、主張と関係ないから違う材料にするといい。」「主張に関係している材料を選んでいるところがいい。」などの発言を取りあげて賞賛し、全体に広げていった。



【資料Ｉ－９　Ａ児の構成表】

資料Ｉ－９は、Ａ児がつくった構成表である。一生懸命という主張に対する具体的な経験や主張とつながりのある材料が加えられていることが分かる。さらに、試しの作文にはなかった理由づけも加えられている。Ａ児は、この構成表をもとに、見直しの作文を書いていった。

資料Ｉ－１０は、Ａ児の見直しの作　文である。見直しの過程で主張が明確になり、責任から一生懸命にかわっている。データは具体的な経験と主張とつながりのある事例が加えられている。さらに、理由づけには、活動を通してのよさが加えられている。このような作文は、主張に納得できる文章であるといえる。



何事にも一生懸命に取り組むこと

高学年として大切なことは、何事にも一生懸命に取り組むことだと思う。なぜなら、一生懸命に取り組むことで自分の力をのばすことができると思うからだ。

五年生になって委員会活動が始まった時、難しそうだなと思った。でも、一生懸命に取り組んでいる六年生を見ると、早く自分も六年生みたいに活動したいなと思うようになった。

一度、委員会の仕事がめんどくさいと思い、さぼった時がある。そんな時、六年生に、「みんなのお手本なんだから、一生懸命にしないといけないよ。」と注意された。どういうことなのか後から友達に聞くと、「高学年は糸田小のリーダーなのだから、一生懸命に取り組む姿が下級生のお手本になるんだよ。」ということだった。この時私は、一生懸命に取り組むことで下級生のお手本になるんだと思った。

委員会だけではない。クラブ活動でも一生懸命に取り組むことは大切だ。一生懸命に取り組むことで、上達するのが速かった。一生懸命さは、自分の力をさらにのばすことができるのだろう。私と一緒に活動していた四年生も私を見て一生懸命にやろうと思ったようだ。

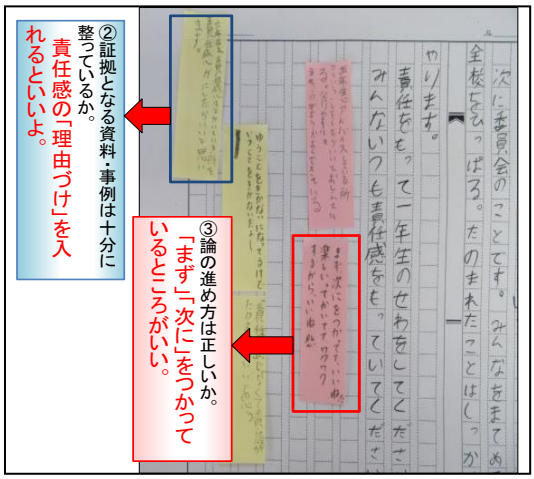
勉強や行事なども一生懸命に取り組めば、きっと自分の力をのばすことにつながると思う。

このように、一生懸命に取り組むことは、下級生のお手本になるし、自分の力をのばすことができるのだ。

だから私は、高学年にとって大切なことは、何事にも一生懸命に取り組むことだと考える。

【資料Ｉ－１０　Ａ児の見直しの作文】

見直しの作文を書いた後、推敲段階での相互評価活動に取り組んだ。ここではチェックリスト（①語の用法は明確であるか。②証拠となる資料・事例は十分に整っているか。③論の進め方は正しいか。）の視点をもとに、評価活動を行っていった。子どもは、友だちの作文を読み、チェックリストをもとにしたアドバイスを付箋紙に書き込んでいった（資料Ｉ－１１）。相手の立場に立って読み、互いの作文のよさを述べたり、アドバイスをしたりすることができた。その後、さらに友だちからのアドバイスを参考に、再度、作文を書き直していった。



【資料Ｉ－１１　相互評価活動】

エ　実践１の考察

資料Ｉ-１２、１３はＢ児、Ｃ児の本単元における作文の変容を示したものである。二つの試しの作文は、共に主張を意識して文章を書くことができている。しかし、主張に対するデータはあるものの材料が具体的でなかったり主張と整合していない材料を選んだりしていることが課題として挙げられる。そのため、赤枠で示したデータの部分は主張に対する根拠になり得ていない。さらに、Ｂ児の試しの作文には「理由づけ」の段落がない。

見直しの作文では、主張に対する材料が具体的になっている。自分が経験したことや見聞きしたこと、考えたことなどの材料が加えられ、主張に対する根拠が明確になっている。Ｂ児の試しの作文には、データから言えるよさを示す「理由づけ」も加えられている。このような文章は、論理的な文章であると言える。

【試しの作文】

高学年として大切なこと

ぼくが、高学年として大切だと思うことは、意識するということだ。高学年にとって大切なことは多くあるけど、その全てを意識して行動することが大切である。

六年生になって、けじめや継続力が大切だと先生に言われた。初めは意識していなかったからなおらなかった。でも、意識するとだんだできてきて、けじめや継続力ができるようになった。できたらうれしくなってきた。意識して真剣に取り組めば、できたときにうれしくなる。

意識とは、心にはっきりと感じることだと本に書いてあった。そして、意識すると行動に表れるということもある。

だから、意識するということは大切だということだ。

【見直しの作文】

どんなことでも意識することが大切だ

ぼくが、高学年として大切だと思うことは、どんなことにも意識して取り組むということだ。

六年生になって、けじめや継続力が大切だと先生に言われた。しかし、そのことを意識せずに活動していると、「意識が足りない。」と言われた。その言葉で、意識することが大切なんだと気づいた。

けじめをつけることやよさを継続することを意識するといろいろなことができるようになった。できるとうれしくなった。

意識するとはどういうことなんだろうと思い辞書で調べた。すると、『心にはっきり感じること。物ごとをはっきりすること。』だと書いていた。

いろいろなことを意識するようになり、素早く行動できるようになった。すると、次の課題が生まれ、いろいろなことができるようになる。

このように、高学年として大切なことは、どんなことにも意識して取り組むということだ。

【資料Ｉ－１２　Ｂ児の作文】

【試しの作文】

高学年として大切なこと

高学年として大切なことは、継続力だと思います。継続力を意識して実行していると、いろいろ良いことがあります。

例えば、けじめをつけることを継続していると、先生が言っていることが頭に入ってきて授業が楽しくなったり、分かりやすくなったりします。そして、授業が早く終わると自分の時間が少し多くなったりもします。他にもいろいろなことを継続したら良いと思います。だけど、一回できたのに継続できないのはもったいないと思います。また、自分のめあては意識して継続することが大切だと思いました。

このように、継続を意識しているといろいろと良いことがあるし、継続することはとても大事なことだということが分かります。

高学年として大切なことは、継続力です。

【見直しの作文】

高学年として大切なこと

私は、高学年として大切なことは、継続力だと思う。継続力は、下級生の良いお手本になると思うからだ。

そう考えるようになったのは、先生の言った言葉で継続することの大切さに気づくことができたからだ。

五年生の終わりごろ、卒業式の練習が始まった。六年生と一緒に練習することが数回あった。呼びかけ、六年生の入場、退場のはく手、その他にもちょっとしたことを練習していった。卒業式では、少しでも動くといけないので、だるくて頭が痛くなった。それに、少しのことで注意されるのでめんどうくさい。六年生の卒業式だからと思ってやっているから練習が嫌でしかたなかった。

二回目の合同練習でも、私はやりたくないという気持ちで練習していた。その時、六年生の先生が、「五年生、もうちょっと気持ち入れな。」と言った。私は、ビクッとした。「六年生を見て。」と言っていた。六年生は、最初の練習ができていたので、二回目の練習も継続できていてとてもよかった。先生に言われなくても態度を変えたりせずに自分で考えてよさを継続していた。六年生を見ていると、今までずっと「継続力をつけなさい。」と言われても気にしていなかった自分がかっこう悪いと思えてきた。

「六年生のため。」そう考えて取り組むと、今まで気づかなかったことに気づけたような気がした。本番のような雰囲気、呼びかけ、歌声、五・六年生の協力、一生懸命さ。気づいたら良い態度、行動をずっと継続していた。もっともっとその態度、行動を継続しようと思った。

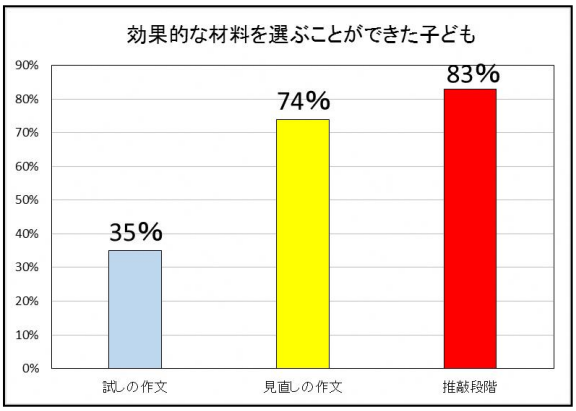
先生はよく「今のみんなには継続力が大切」という話をする。私は卒業式の練習を通してその言葉の意味を深く感じることができた。

卒業式の練習でも、「五年生に任せられる。」「良い六年生になるね。」と言ってもらえたし、卒業式の日や卒業式のあとも「五年生の態度がよかったよ。よさが継続できているね。」と言ってもらえた。その時、きつくてもがまんして良い態度を継続してよったと思った。そうほめられてとてもうれしかった。あのまま練習に気持ちを込めていなかったら、きっと、この気持ちは味わえなかっただろう。

私は、きつくても、苦手でも、一度できたことを継続することが高学年として大切なことだと思う。その姿が下級生のお手本になる。下級生にも継続することを意識してほしい。どんなことでも継続してできる。それが高学年として大切なことだと思う。

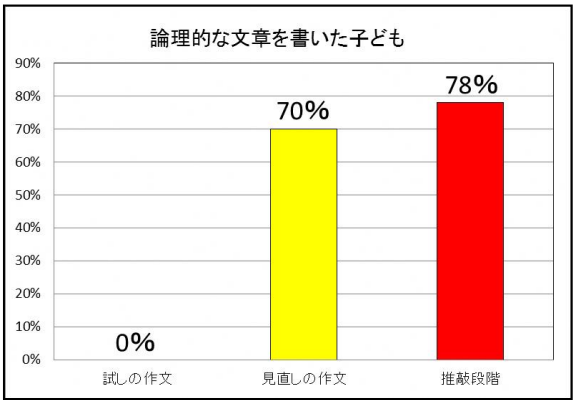
【資料Ｉ－１３　Ｃ児の作文】

資料Ｉ－１４のグラフは、論証の構造　をもとに、効果的な材料を選ぶことができた子どもの割合である。試しの作文の段階では、３５％しかいない。しかし、論証の構造を生かした活動を設定することで、見直しの作文の段階では７４％の子どもが材料を集めることができた。さらに、推敲段階では、８３％にまで増えていることが分かる。



【資料Ｉ－１４　効果的な材料を選ぶことができた子どもの割合】

さらに、資料Ｉ-１５は、論理的な文章を書いた子どもの割合である。試しの作文の段階では、３５％の子どもが主張に対して効果的な材料を選ぶことはできたが、論理的な文章を書いた子どもは一人もいなかった。これは、主張に合う材料を選んだにもかかわらず、記述が具体的になっていない、理由づけの段落がないことが理由として挙げられる。しかし、論証の構造を生かした活動を設定することで、見直しの作文の段階では、７０％の子どもが論理的な文章を書くことができた。さらに、推敲段階では、７８％にまで増えていることが分かる。



【資料Ｉ－１５　論理的な文章を書いた子どもの割合】

これらは、「論証の構造」を生かした活動を設定したことにより、子どもがモデル作文をもとに作文のきまりを見つけたことで、自分の作文の課題を明確にすることができたためであると考える。そのため、子どもの意識として、より相手の納得・共感を得ることができる文章にしようとする適材意識が高まり、主張に合うより効果的な材料を選ぶことができたと考える。さらに、見直しの作文の段階において、再取材した後の構成表を相互評価し、主張と材料のつながりや材料の妥当性を吟味したこと、推敲段階でのチェックリストをつかった相互評価を行ったことで、相手の側に立って文章を考えることができたからであると考える。

これらのことから、「論証の構造」を生かした活動を設定したことは、説得力をもたせるためのより効果的な材料を選び、主張したいことが明確に伝わるように論理的な文章を書く上で一部有効であったと考える。

しかし、依然として効果的な材料を選ぶことができていない子どもが数名いることは課題として挙げられる。子どもの実態を踏まえた上で、どのような題材が適しているのかを十分に検討し、より多くの子どもが効果的な材料を選ぶことができ、論理的な文章を書くことができる力を育成しなければならないと考える。

○　着眼１においては、５年生に伝えるという状況づくりを行うことで、より伝わる文章

にしたいという思いを高め、論証の構造に対する必要感をもつことができた。説得力のある文章にするために、どんな材料が必要かを考え、より効果的な材料を選ぼうとする意欲を高めることができたことが成果として挙げられる。

○　着眼２においては、論証の構造を見いだす活動、論証の構造を生かした相互評価活動、推敲段階での相互評価活動の三つを設定したことで、子どもは論証の構造を理解することができた。論証の構造を生かして再取材することで、効果的な材料を選び、論理的な文章を書くことができたことが成果として挙げられる

●　着眼１においては、主張が大きくなりすぎてしまうなど題材に課題が残った。今後、子どもが主張したいことをしぼることができるように、題材を工夫する必要があると考える。

●　着眼２においては、１７％の子どもは効果的な材料を選ぶまでには至らなかった。今後、違う文種でも論証の構造を生かして取り組む必要があると考える。さらに、できた子どもに、論証の構造を使わせると半数以上の子どもが使うことができなかった。これは、まだ論証の構造を活用するまでには至っていないということだと考える。今後さらに、違う文種においても実践し、子どもが活用することができるようにする必要があると考える。

（２）授業実践Ⅱの実際と考察

ア　単元 友だちに共感してもらえるように、夢について書こう
～ぼく・わたしの夢～

イ　単元の目標

○　効果的な意見文を書くために、進んで自分の考えを明確にするための材料を集めたり、取捨選択したりすることができる。　**（関心・意欲・態度）**

◎　目的や意図に応じて、書く必要のある事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理することができる。　**（書く能力）**

○　文や文章にはいろいろな構成があることについて理解することができる。
（言語についての知識・理解・技能）

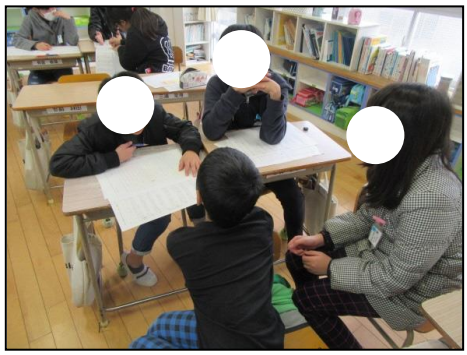
ウ　授業の実際

【着眼１】　切実な問題を生み出す状況づくり

本単元においては、自分の将来の「夢」について語り合うことを通して、相手意識・目的意識をもたせるようにした。未来の自分や友だち、家族に共感してもらうという有用感に向けて活動することで、価値意識を高めていった。モデル作文と試しの作文の比較から、自分の作文の問題点を見つけ、自分の主張を効果的に伝えるためにどんな材料を補うと効果的なのかという適材意識をもたせるようにした。このように、相手意識・目的意識と適材意識をもたせる単元づくりを行った。

単元の導入における単元設定としては、相　手・目的意識をもたせるために、将来の「夢」

について語り合う場を設定した（資料Ⅱ－１）。子どもは、「わたしの将来の夢は、保育士だよ。だって、子どもがかわいいし、お世話するのが好きだから。」「ぼくは、家族みんなが学校の先生だから、先生になりたいな。」などと、自分の夢とその理由について語り合う姿が見られた。そこで、このような子どもに、「今のみんなの夢を何かで形に残したいね。」と投げかけた。すると、子どもからは、「作文を書いて夢文集をつくりたい。」という意見が出された。中には、「自分の夢をみんなに知ってほしい。」や「自分の夢に共感してもらえたらいいな。」などとつぶやく姿も見られた。さらに、「作った文集を誰に読んでもらいたいですか。」と投げかけた。子どもからは、「友だちに読んでもらいたい。」「お家の人に読んでもらいたい。」などと意見に同調していき、話し合いがまとまっていった。



【資料Ⅱ－１　夢を語り合う子ども】

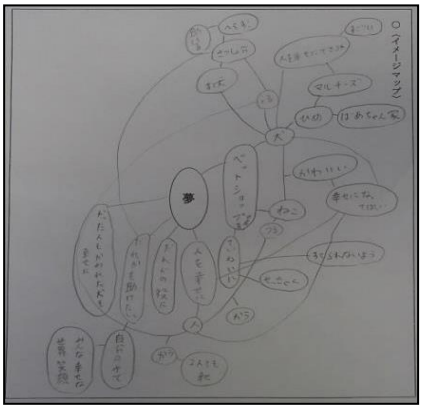
このように、「将来の夢」を語り合う場面を　設定することで、相手意識・目的意識をもたせ、自分の夢を相手に共感してもらうという価値意識をもたせることができた。

【着眼２】「論証の構造」を生かした学習活動の設定

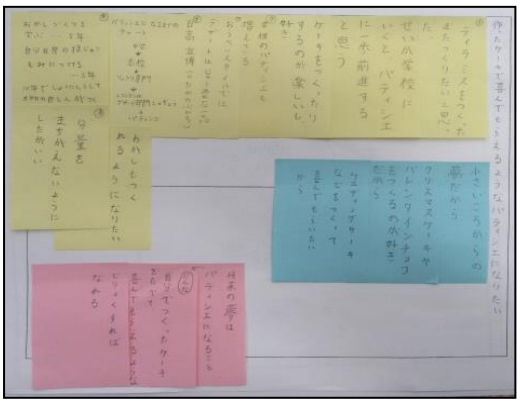
①論証の構造を見いだす活動

［試しの作文を書く段階］

主張したいことを明確にすることができるように、イメージマップで「夢」に対する考えを絞り込んでいった（資料Ⅱ－２）。子どもは、イメージマップをつくりながら、自分が主張したいことを見つけることができた。


○イメージマップ
夢
人
ペットショップ
ねこ
ひめ
ほあちゃん家
マルチーズ
ありがとう
幸せになってほしい
まごころをわかってほしい
そーさくん
パラ
ゴールデンレトリバー
人を喜ばせる
人とのつながり
すばらしい夢がもてた
たくさんかがやいたんだ
まごころ
自分のペット
みんな幸せ
笑顔
ゴールデンレトリバー
ゴールデンレトリバー
ペットショップ
まごころ
ペットショップ
ペットショップ
ペットショップ

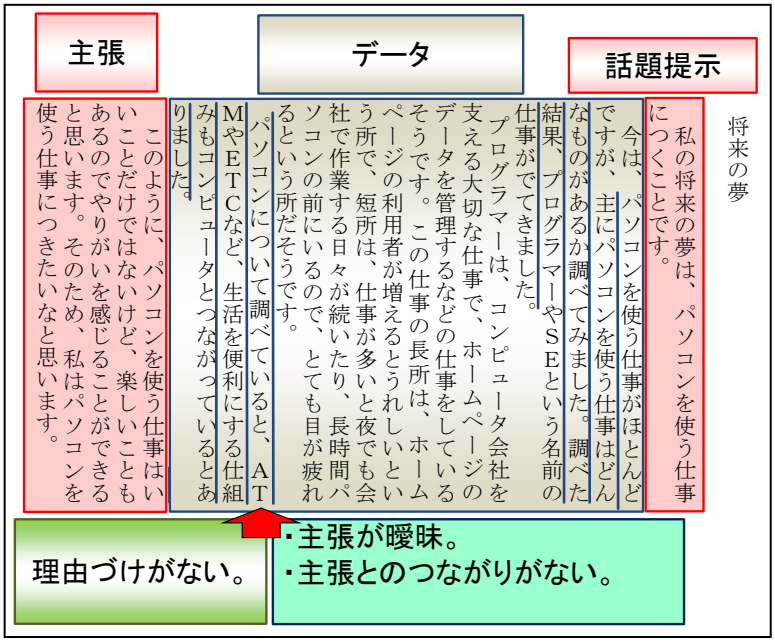
主張したいことを明確にした後、取材活動を行い、材料を集めた。資料Ⅱ－３は、子どもが集めた材料である。本実践においては、論証の構造を生かすことができるように、話題・主張をピンク、データを黄、理由づけを青の付箋紙に色分けをして、取材したことを書き込むようにした。子どもは、このようにして集めた材料の中から、より効果的な材料を取捨選択しながら試しの作文を書いた。



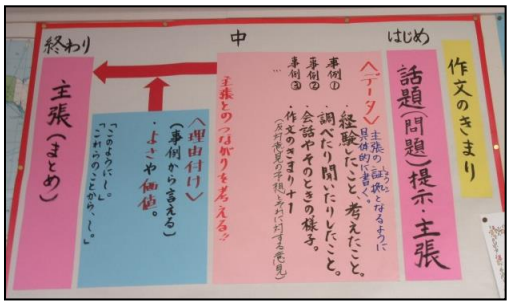
【資料Ⅱ－３　子どもが集めた材料】

○試しの作文

Ａ児は、初めの主張を「やりがいを感じる仕事だ」として試しの作文を書いている。主張を意識して文章を書くことができているものの、「やりがいを感じる仕事だ」ということを主張する文章になりえていない。これは、主張とデータとのつながりがないこと、データからいえるよさ、価値についての「理由づけ」がないことが理由として挙げられる。子どもは、論証の構造（資料Ⅱ－５）をもとに作文を書いていったが、このことからも、論証の構造が子どもの中に定着していないことがうかがえる。

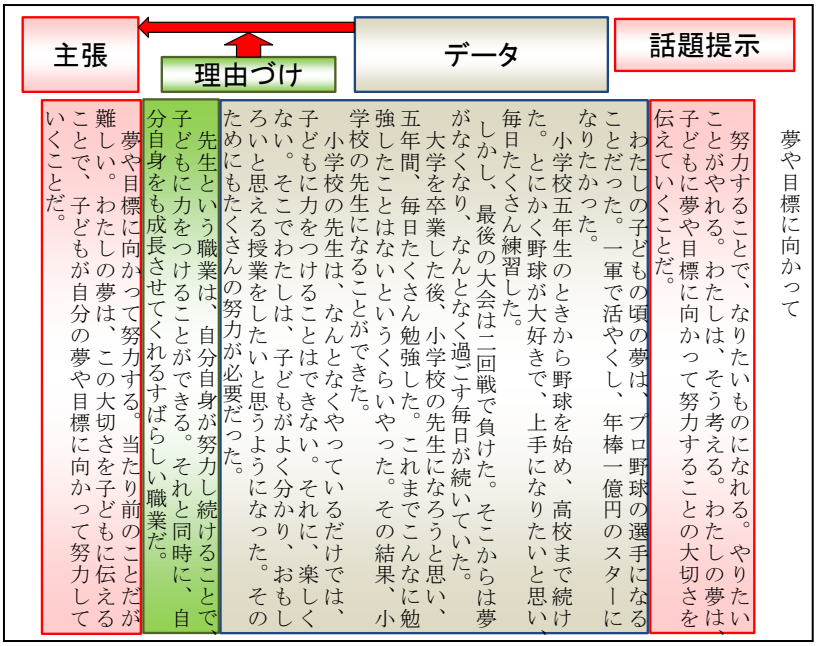


【資料Ⅱ－４　Ａ児の試しの作文】



【資料Ⅱ－５　論証の構造】

試しの作文を書き終えたあと、友だちの主張に共感できるかを視点にそれぞれの作文を読み合い感想を交流した。子どもは、「将来の夢は分かるけど、共感できない。」などと感想を交流する姿が見られた。そのような中で、どうすれば共感してもらえる作文を書けるかという疑問をもった子どもにモデル作文を提示した（資料Ⅱ－６）。



【資料Ⅱ－６　モデル作文】

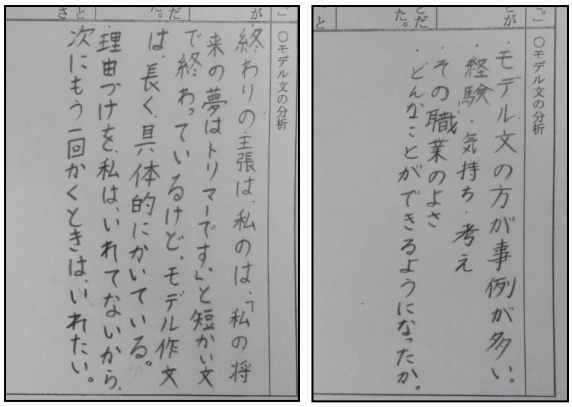
このモデル作文を読み、感じたことや気づいたことなどの感想を交流した。子どもからは、

- 主張したいことが分かりやすい。　・共感できる。　・職業に対するよさがある。
- 理由づけが詳しく書いてある。　・夢をもったきっかけがあっていい。
- いいことだけじゃなく、悪いことも書いている。
- データの部分に主張につながることがたくさん書いている。

などの感想が出された。そこで、自分の試しの作文に補うべき材料に気づくことができるように、モデル作文と試しの作文とを比べて、共通点や差異点を見つける活動を設定した。

【資料Ⅱ－７　共通点や差異点を見つける子ども】

資料Ⅱ－７は、モデル作文と自分の試しの作文を比べている子どもの様子である。子どもは、モデル作文を分析していく中で、「自分の経験を書いているところは、モデル作文と同じだ。」「その職業のよさを書いているところが共通しているな。」や「モデル作文は、事例が詳しくて分かりやすい。自分の文章は、分かりにくいな。」「わたしの作文には、理由づけがなかった。」「夢をもったきっかけが書いてある。」などの共通点や差異点を見つけワークシートにまとめることができた（資料Ⅱ－８）。さらに、「理由づけの段落にはどんなことを書けばよいのだろうか。」という子どものつぶや

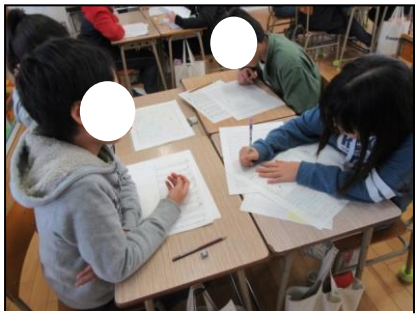


【資料Ⅱ－８　子どものワークシート】

きを取りあげ、材料からいえるその職業のよさや価値を述べることを確認していった。

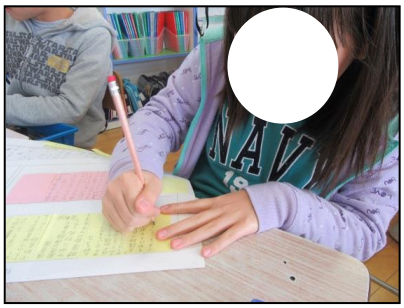
その後、どのような材料を補えばよいかを明確にすることができるように、論証の構造や見つけた共通点や差異点をもとに話し合う活動を設定した。

資料Ⅱ－９は、どのような材料が必要かを話し合う子どもの様子である。子どもは、論証の構造やモデル作文から、「夢をもったきっかけ」「自分の経験」「考えたこと」「その職業について」「その職業のよさ」という材料の視点を明確にしていった。さらに、これらの材料を具体的に述べることや主張とつながりのある材料が必要であることを明らかにすることができた。その後、これらの視点をもとに再取材を行った。

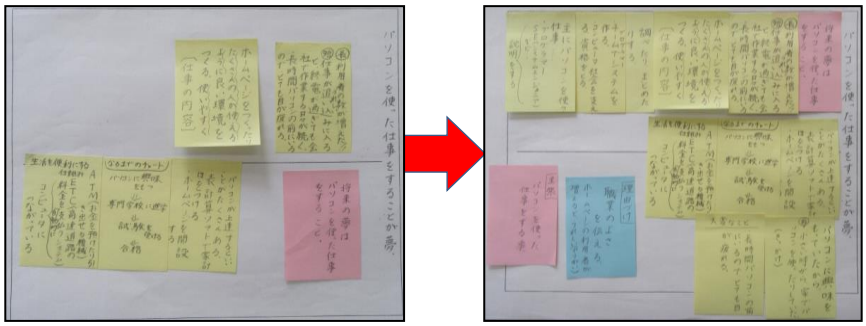


【資料Ⅱ－９　補うべき材料の視点を話し合う子ども】

資料Ⅱ－１０は、視点をもとに再取材をする子どもの様子である。取材の視点を明確にすることで、子どもは主張に対してより効果的な材料を集めようと意欲的に取り組んでいった。さらに、資料Ⅱ－１１は、子どもの試しの作文での材料カードと視点をもとにした再取材での材料カードである。このことからも分かるように、集材した材料の質・量ともに主張に対して効果的な材料が増え、「理由づけ」の材料も集めることができた。



【資料Ⅱ－１０　視点をもとに再取材する子ども】



【試しの作文での材料カード】　【再取材での材料カード】

【資料Ⅱ－１１　子どもの材料カードの変容】

②論証の構造を生かした相互評価活動

再取材をしたあと、集めた材料の中から主張に対してより効果的な材料を選ぶことができるように、モデル作文をもとに、効果的な材料について話し合う活動を設定した（資料Ⅱ－１２）。初めに、本実践においては、４００字程度の文章で書くことを条件として提

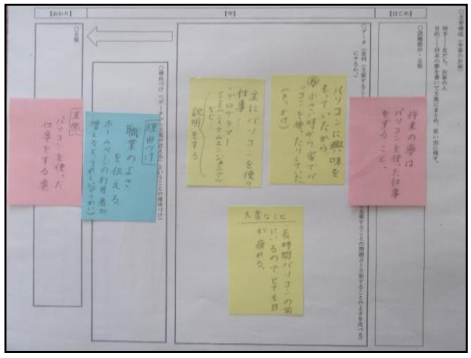
【資料Ⅱ－１２　モデル作文の材料カード】

示している。そのため、一つの事例を具体的に書くためには、データの部分である材料を二つから三つ選んで書くことを確認した。その後、自分だったらどの材料を選ぶかを考え、その理由を交流するようにした。

子どもは、モデル作文の主張である「夢や目標に向かって努力することの大切さを伝えていくこと」がより伝わるように、材料を、主張と関係あるものとないもので分けたり、読み手の視点に立って考えたりしていった。このような話合いを通して、「主張とつながりのある材料を選ぶ」ことや「読み手の視点で共感できる材料を選ぶ」という選材の視点を見いだしていった。

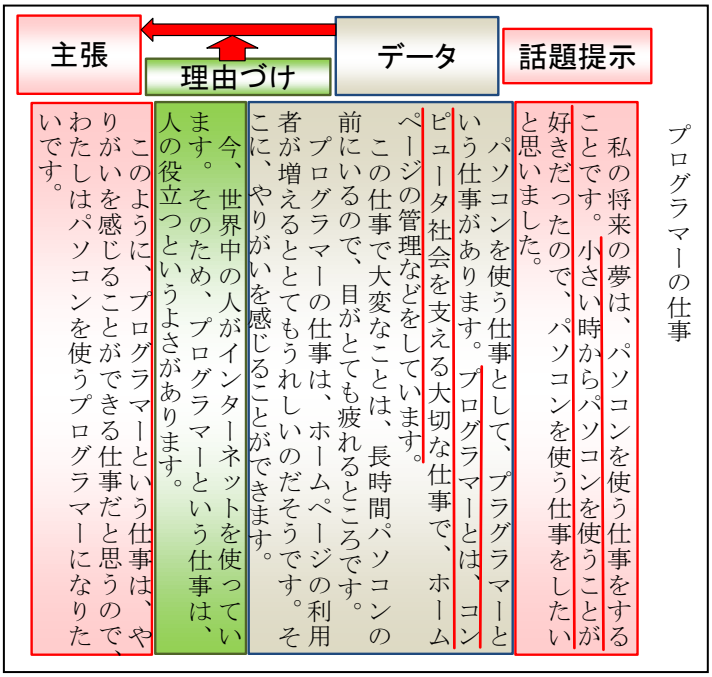
その後、子どもは、この視点をもとに自分が集めた材料からより効果的な材料を選び、構成表をつくっていった。子どもは、自分の主張とつながりのある材料をいくつか選び、「どれが共感できるかな。」と、材料を吟味していった。

資料Ⅱ－１３は、A児がつくった構成表である。子どもは、このような構成表をもとに相互評価していった。子どもはお互いの構成表を評価する中で、「この材料だと、主張に共感できるよ。」「主張とつながっているところがいいよ。」や「主張とつながりのない材料を選んでいるから、他の材料を選んだらいいんじゃない。」など、論証の構造をもとに評価していく姿が多く見られた。



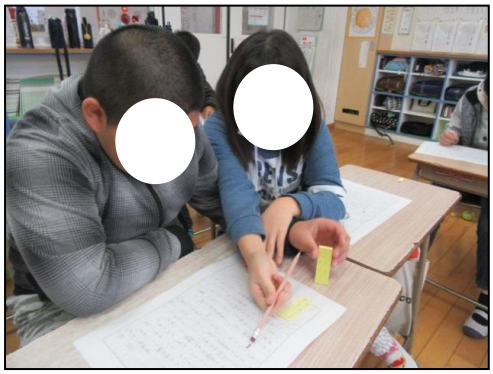
【資料Ⅱ－１３　A児の構成表】

A児は、この構成表をもとに見直しの作文を書いていった。資料Ⅱ－１４は、A児の見直しの作文である。A児は再取材の過程で、「夢をもったきっかけ」「その職業について」「理由づけ」の材料を加えている。また、材料も主張とつながりのあるものに修正されており、明確になっている。さらに、理由づけには、その職業の価値が加えられている。このような作文は、主張に共感できる文章であるといえる。



【資料Ⅱ－１４　A児の見直しの作文】

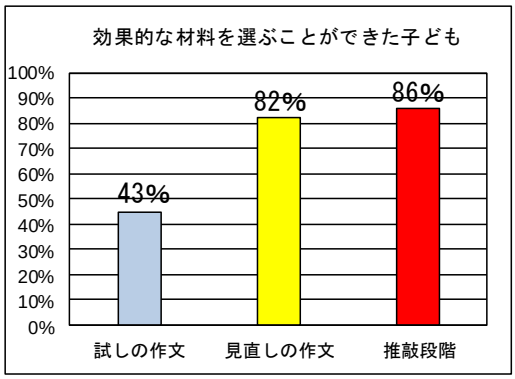
見直しの作文を書いた後、推敲段階での相互評価活動に取り組んだ（資料Ⅱ－１５）。チェックリストの視点をもとに、相互評価活動を行った。子どもは、友だちの作文を読み、「理由づけに、職業のよさを書いているから共感できるね。」「この事例が効果的だね。」、「この材料は、主張とつながりがないから、こっちの材料にしたらいいんじゃない。」などと、考えを交流しながら評価活動を行うことができた。



【資料Ⅱ－１５　推敲段階での相互評価活動】

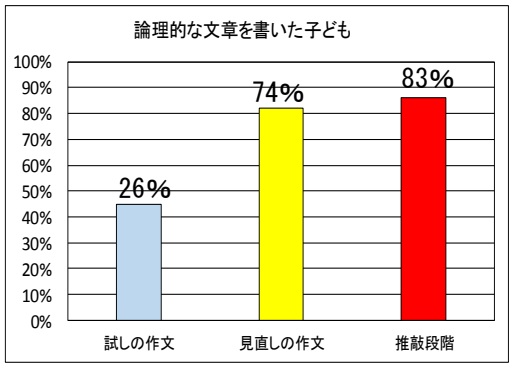
エ　実践２の考察

資料Ⅱ－１６は、効果的な材料を選ぶことができた子どもの割合である。試しの作文の段階では、４３％の子どもが材料を選ぶことができている。論証の構造を生かした活動を設定することで、見直しの作文の段階では、８２％の子どもが材料を選ぶことができた。さらに、推敲段階では、８６％の子どもが効果的な材料を選ぶことができた。



【資料Ⅱ－１６　効果的な材料を選ぶことができた子どもの割合】

さらに、資料Ⅱ-１７は、論理的な文章を書いた子どもの割合である。試しの作文の段階では、４３％の子どもが主張に対して効果的な材料を選ぶことはできたが、２６％の子どもが論理的な文章を書いた。これは、主張に合う材料を選んだにもかかわらず、記述の内容が主張と整合していないことや、理由づけの段落がないことが理由として挙げられる。しかし、論証の構造を生かした活動を設定することで、見直しの作文の段階では、７４％の子どもが論理的な文章を書くことができた。さらに、推敲段階では、８３％にまで増えていることが分かる。



【資料Ⅱ－１７　論理的な文章を書いた子どもの割合】

これらは、「論証の構造」を生かした活動を設定したことにより、モデル作文をもとにどんな材料があれば相手に共感してもらえるのかを話し合うことで、自分の作文の課題と不足している材料を明確にすることができたためであると考える。そのため、子どもの意識として、より相手の共感を得ることができる文章にしようとする適材意識が高まり、主張に合うより

効果的な材料を選ぶことができたと考える。さらに、見直しの作文の段階において、再取材した後の構成表を相互評価し、主張と材料とのつながりや材料の妥当性を吟味したこと、推敲段階でのチェックリストをつかった相互評価を行ったことで、相手の側に立って文章を考えることができたからであると考える。

これらのことから、「論証の構造」を生かした活動を設定したことは、説得力をもたせるためのより効果的な材料を選び、主張したいことが明確に伝わるように論理的な文章を書く上で一部有効であったと考える。

しかし、本単元の題材をより検討する必要があった。それは、子どもの作文が「将来の夢」で終わってしまい、「夢」の価値にまで意識が向かなかったためである。そのため、子どもの実態、興味関心を踏まえた上で、どのような題材が適しているのかを十分に検討し、より多くの子どもが効果的な材料を選ぶことができ、論理的な文章を書くことができる力を育成しなければならないと考える。

○　着眼１において、将来の夢について書くという状況づくりを行うことで、論証の構造をもとにより共感してもらえる文章にしたいという思いを高めることができた。さらに、構造を生かして、主張を支えるためのより効果的な材料を選ぼうとする意欲をも高めることができた。

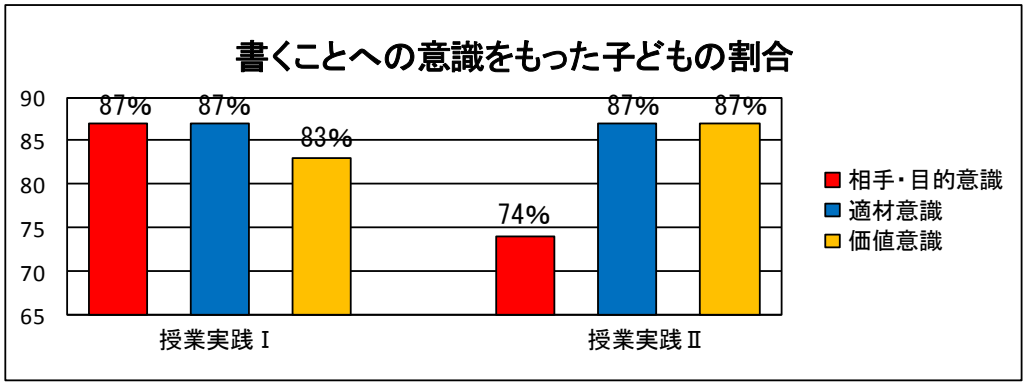
○　着眼２において、「論証の構造」を生かした活動を設定したことで、８６％の子どもが材料を過不足なく集めることができた。論証の構造を生かして取材活動を行うことで、子どもは、より効果的な材料を選び、適切に文章表現することができた。

●　着眼１において、相手意識・目的意識をもたせることはできた。しかし、主張が「将来の夢」で終わってしまう子どもが数名いた。これは、子どもの意識が「将来の夢」でとどまってしまい、夢の価値にまで意識が向かなかったためと考えられる。そのため、子どもの意識が主張に向かうように題材のさらなる工夫が必要である。

●　着眼２において、１４％の子どもは効果的な材料を選ぶまでには至らなかった。今後は、文章を書く際に、論証の構造を生かして書く機会を設定し、定着させていく必要があると考える。さまざまな場面で論証の構造を生かし、子どもが活用することができるようにする必要があると考える。

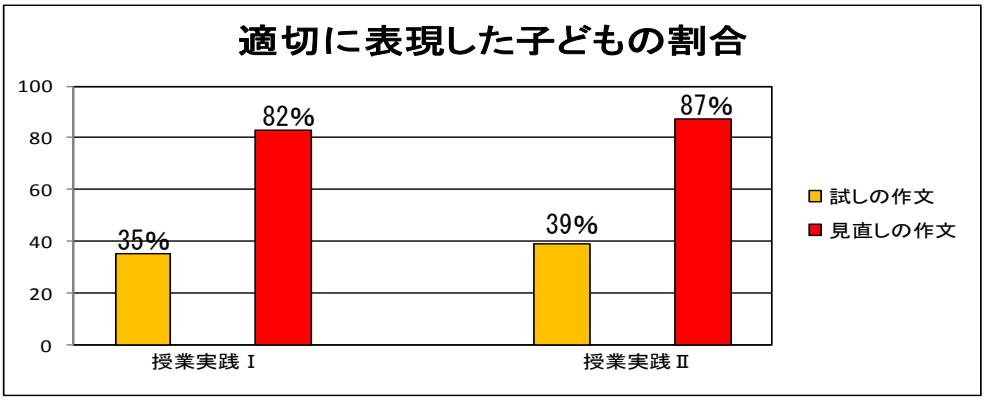
（３）　全体考察

○　切実な問題を生み出す状況づくりを行うことで、子どもの相手意識・目的意識をもたせることができた。また、書いた文章を発信する場や反応を確認する場を設定したことで、書くことへの価値意識を見いだした子どもの姿を見ることができた。さらに、モデル作文を提示して自分の試しの作文と比較し、共通点や差異点を見つける活動を設定することで、「どんな材料を選ぶとよいか。」という適材意識をも高めることができた。資料３は、授業実践Ⅰ・Ⅱの振り返りの中で、相手・目的意識、適材意識、価値意識をもった記述が見られた子どもの割合である。授業実践Ⅰ・Ⅱともに、学級の８０％程度の子どもが書くことへの意識をもっていることが分かる。このことから、本研究の切実な問題を生み出す状況づくりは、相手・目的意識、適材意識、価値意識を高める上で、一部有効であった。



【資料３　書くことへの意識をもった子どもの割合】

○　「論証の構造」を生かした活動を設定することで、子どもは、これまでに気づかなかった、主張と材料とのつながり、材料の不備・不足に気づくことができるようになった。さらに、相手の納得・共感を得ようと、自分の文章を繰り返し読むことで主張したいことに対してより効果的な材料を選ぶことができた。資料４は、見直しの作文に変容が見られ、適切に表現した子どもの割合である。このことから、本研究の「論証の構造」を生かした活動の設定は、一部有効であった。



【資料４　適切に表現した子どもの割合】

●　状況づくりに関して、授業実践Ⅱでは、相手・目的意識をもった子どもが７４％しかいなかった。これは、相手が不特定多数であり、「将来の夢」について書くという目的が明確

でなかったことが要因として挙げられる。そのため、子どもが主張と材料の整合性を吟味して書くためには、相手・目的を明確にし、焦点化する必要があることが明らかとなった。

● 「論証の構造」を生かした活動の設定では、普段の生活においても意識して活用することができるようにする必要がある。また、子どもにどのような構造に気づかせたいのかを十分に検討した上で、モデル作文を提示する必要があった。

7 成果と課題

○ 題材との出会わせ方を工夫して相手意識・目的意識をもたせたり、文章を書くことの価値意識をもたせたりするなど、子どもの切実な問題を生み出す状況をつくったことは、子どもが主張を支えるためのより効果的な材料を選ぼうとする意欲を高める上で有効であった。

○ 「論証の構造」を具体化したモデル作文を提示し、見いだした構造をもとに自分の作文を分析したことで、作文の材料の不備・不足から再取材するという必要感をもたせたり、説得力をもたせる効果的な材料を選ぶ力を育てたりする上で有効であった。

● 作文を書くことにおいて、誰に、何のために書くのかを明確にすることができる題材の開発。

● 「論証の構造」を使って文章を書く場の複数設定とモデル作文の提示や活用方法のさらなる工夫。

＜参考文献＞

１）文部科学省　『小学校学習指導要領解説　国語編』　東洋館出版社　２００８年

２）文部科学省　『小学校学習指導要領解説　国語編』　東洋館出版社　２０１８年

３）井上尚美　『２１世紀型授業づくり　思考力育成への方略－メタ認知・自己学習・言語理論－〈増補新版〉』　明治図書出版　２００７年

４）野口芳宏編　日向教育サークル著　『国語科で育てる新しい学力１　論理的な思考力の育成』　明治図書出版　２００９年

５）田近洵一・井上尚美　『国語教育用語辞典』　教育出版社　１９９３年

６）大槻和夫　『国語科重要語３００の基礎知識』　明治図書出版　２００１年

７）高木まさき他　『国語科重要用語事典』　明治図書出版　２０１５年

８）国語教育研究所　『作文技術指導大事典』　明治図書出版　１９９６年

９）大西道雄　『作文教育における文章化過程指導の研究』　渓水社　２００４年

１０）小森茂編　『生きてはたらく国語の力を育てる授業の創造』　ニチブン　２０００年